

# 集団生活における自然体験活動が人間形成に与える影響 —長野県における「ふれあい自然体験キャンプ」を例として—

青木 美絵

## はじめに

「自然」というものは一言で表現することは大変難しく、捉え方はあまりに曖昧である。一般的には緑や水、野山を想像し、地球環境としての「自然」をさすことが多いようだ。わたしはこの自然環境のほかに、人間に存在する内なる精神も「自然」と捉え、内なる精神を「人間的自然」と称し二つの視点から考えようと思う。我々の生活は合理化が進み、人を取り巻く自然環境の破壊は顕著である。同時に合理化は人間的な自然にまで及び、破壊が進行していると考えられる。どちらの破壊も深刻ではあるが、我々は残された自然の大切さに気づき始めている。何より人間はあらゆる自然の破壊が進む中でも常に自然の中に生きていく運命にある。そして現代人はより自然を求め、自然を欲しているような気がする。

「自然体験」とは単に自然環境に触れることだけでなく、日ごろの生活では気づきにくい、内なる自然に触れることでもある。私たちは野山へ出かけ目の前にある自然を体験すると同時に、自然の一部である自分の姿に気づく。このことは自然体験を通して「自己体験」をしているとも捉えられる。そして今回、私はこの自己体験を通して自己を表現する「自己実現」へ結びつけるための一つの活動形態として自然体験活動を取りあげる。同時に、自然体験活動には人と自然とのふれあいだけでなく、自然を介して人と人を結びつける要素を多分に含んでいるのではないかと考える。

社会や組織、集団などにおいて人と人が相互に関わりを持つということは心理面、感情面で多くの葛藤が生まれる。人それぞれ、違う感性を持った人間が理解し合い、つながりを保つということは実は容易なことではない。まずは己を知ること、自己体験があってこそ他者との関わりを築いていくことができる。また、他者とのよりよい関係（充実した人間関係）を築くということは自己実現の一つであることとらえることもできそうだ。我々はこの自己体験から自己実現への過程を積み重ねていくことで自己形成をしていくのではないかと。

自然体験活動は今や活動の幅も広く、人によっては解釈や捉え方も違うだろう。しかし、わたしはこれまでいくつかの自然体験活動にスタッフとして関わってきて、環境としての自然、人間的な自然は無数の可能性を秘めている気がしてならない。この論文では現在、長野県で実施されている「ふれあい自然体験活動推進事業」（以降、ふれあいキャンプと表記）について取り扱う。この事業は長野県の豊かな自然環境の中で、人と人との関わりを重視し、

まさしく人間的自然を体験するものである。私はこの事業を吟味し、参加した子ども、スタッフの事後を調査していく。そして各々が自己体験をし、更なる自己実現へつなげていく過程を考察することを本論文の目的とする。

## 第一章 ふれあい自然体験キャンプの概要

本事業は不登校児童生徒及び不登校傾向の児童生徒を対象にしている。よって、「不登校」という言葉を切りはずして考えることはできない。ここでまず一般的な不登校の定義について触れる。

日本では1960年（S35）頃からこの問題が表面化し、社会問題として扱われはじめたのは1980年代以降のことである。1998年あたりからは「登校拒否」に変わって「不登校」という表現で広く使用されるようになった。文部科学省は「学校基本調査」の中で「不登校児童生徒」を次のように定義している。

「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」

本論文の中でも「不登校」をこの定義に沿って使用していくこととする。

### 1. 事業開始の背景

1992年（H4）、文部省（現文部科学省）は『登校拒否問題への対応について』を都道府県教育委員会に通知している。この通知からはそれまでの見識とはまったく異なる点が大きく分けて2つ読み取ることができる。1つ目にかつては登校拒否を「本人の性格が主因」としていた文部省が「どの児童生徒にも起こり得るもの」とし、学校生活にも要因があるという見解に転じている点である。2つ目には一定の要件を満たす場合、学校以外の施設で相談・指導を受けた日数も登校日数に換算するという点である。深刻化していた問題に対し、行政の対応としてはかなり遅いものとなったかもしれない。しかし、この通知により事態の改善に向うべく、多様な取り組みが全国的に実施されていった。

長野県でも不登校は年々増加し、緊急の課題として認識された。具体的な施策として中間教室の設置やスクールカウンセラーが配置、民間ではフリースクールが運営されはじめている。今回取り扱う「ふれあい自然体験活動推進事業」（ふれあい自然体験キャンプと表記）はこうした背景の中で、不登校対策へ社会的教育的視点からのアプローチにより長野県教育委員会主催の不登校対策事業として1995年（H7）に始まった。

### 2. 実施目的

2004年（H16）現在の実施目的は、

「不登校児童生徒を含めた異年齢の小中学生を対象に、学校・家庭とは異なる環境の中で、自主性、社会性等「生きる力」の育成を図りながら、不登校児童生徒の学校生活への復帰を支援する。」  
(平成 16 年度 事業報告書)

である。発足当初は「モデル事業」という表記があったが 1999 年には削除され、新たに「学校・家庭とは異なる環境の中で」、「生きる力」という 2 つの言葉が加わっている。この「生きる力」という言葉は 1996 年の中央教育審議会第一次答申に登場して以来、文部科学省の教育改革の基本姿勢を示すスローガンとして使用されてきた。「生きる力」という言葉が日本の教育界に強い影響力を持ち、本事業にも少なからず影響があったことがうかがい知れる。

### 3. 実施主体・組織

ふれあい自然体験活動推進事業は長野県教育委員会の主催事業として始まったわけだが、1997 年 (H9) からは長野県教育委員会の委託事業となっている。また以降 5 年間、県内 5 市町村においてキャンプが実施されており、モデル事業として事業が拡大していった。

県教育委員会は各実施主体（キャンプ地）において事業を実施している。その組織は実施運営本部（少年自然の家所長、少年自然の家職員、教育事務所生涯学習担当教育支援主事等）を軸に、リーダー（学識経験者、野外活動専門家、地区校長会長、適応指導員、青少年団体関係者、養護教諭・看護師等）とスタッフ（少年自然の家所長により依頼を受けた学生等のボランティアスタッフ）によって構成されている。

### 4. 参加者

参加者の対象は不登校児童生徒を 3 割程度含む小学 4 年生から中学 3 年生までの児童生徒となっている。不登校にある子どもと不登校でない子どもと一緒にキャンプに参加することはこのキャンプの特色の一つであるといえる。これには以下の理由があげられる。

- ①不登校は、特別な子に起こる特殊な現象ではないのだから、こうした傾向にある子供たちだけに限定してキャンプを実施するのは不自然な感がある。
- ②保護者、子供ともに多くの幅広い人との交流が可能になる。
- ③不登校予備軍ともいべき子供たちの参加が期待できる。

(平成 7 年度 事業報告書)

実際の参加者には学年に幅があることが想定され、プログラムにおいて小学生から中学生までが有意義に参加可能なプログラムを組み立てている。運営状況から若干の変動はあるが、一回のキャンプで 50 人程度の人数制限を設けている。また、参加者の募集は実施主体が行い、多くの児童生徒が参加できるよう努められている。参加者の主な参加のきっかけとしては学校や中間教室の紹介や知人の紹介が挙げられる。

## 5. 実施内容

長野県は南北に長く、また、その面積の多くが山に囲まれている。よってキャンプ地には活動場所によってそれぞれ気候、地形、フィールドとして特徴があり、プログラムにも若干の違いがある。望月キャンプでは野営（ソロキャンプ）と乗馬体験、阿南キャンプでは夜間登山や川遊びが代表的なプログラムとなっている。また、市町村キャンプで実施されたものとしてはそば打ち体験やきのこ採り、草木染め、農業体験など各所の風土に合わせたプログラムが展開されている。

「ふれあい自然体験キャンプ」は二期に分かれ実施されている。短期キャンプはプレキャンプとも呼ばれ、6月下旬から7月上旬に1泊2日、長期キャンプは7月下旬から8月上旬の5泊6日（H13からは6泊7日）に行われている。また、1997年（H9）までは事後の参加者へのフォローを兼ねて事業報告会と交流会が実施されていた。現在は事後フォローキャンプとしてボランティアスタッフ（チーム75）の主催で1997年（H9）からかつてのキャンプ参加者で中学校を卒業した者を対象に「おかえりキャンプ」を実施している。当時のスタッフ（OB・OG）、現役スタッフなども共に集い、キャンプを巣だった者が再びキャンプに戻ってくるという意味をこめて、「おかえりキャンプ」と呼んでいる。

## 第二章 事業の特徴

本事業は集団生活体験を自然の中で実践することによって、第一章の2で述べた実施目的を達成させることをねらいとしている。その上での基本的な事項の捉え方を述べていく。

### 1. 不登校についての考え方

第一章において「不登校」の定義について簡単に述べたが、「不登校」とはあくまで長期にわたって学校から遠退いているという状態を指し、不登校となった原因や様子などは個々によって様々である。実際、このキャンプには多くの不登校児童生徒の参加があるが、児童生徒がどのような不登校の状況にあるのかは特定することができない。しかし少なくとも親元から離れ、数日間キャンプ生活を共にすることができる段階であると考えられる。

参加者の中には閉じこもりや人見知りが強い傾向にある者も多いことからして、不登校児童生徒がキャンプに参加すること自体、大きな第一歩であると考えられる。参加に当たっては児童生徒の意思を優先し、プログラムの参加やキャンプ自体への参加において無理をさせたり強く引きとめたりしないということで合意されている。実際、参加の申し込みはしたものの、当日何らかの理由で参加を見合わせる者や途中で帰宅する者もいる。

時に、不登校児童生徒は「本人が特異な問題を抱えた者」や、単に「怠けている者」として捉えられてしまうこともある。しかしその実態は家庭や学校など周囲の環境など、何らかの具体的な問題から不登校になる場合や自分の生き方の中で学校と関わりを持たないという選択をしている者もいる。そしてそれら要因が複合的である場合もある。そして学校へ通わないと選択したとしても新たな道を見出せずにいるケースが多い。つまり学校へ通わずして

も、いかなる場所においても自己が実現できていない状況にあるといえる。そういう意味でもこのキャンプは自己実現のために、ありのままの自己を見出す、自己を体験する、自己を認識するということを根本の理念においた。

前章ではこのキャンプが不登校児童生徒の学校復帰を支援するために設けられたと述べたが、学校へ再登校することがすべての成果とは考えていない。再登校というのは、キャンプ後、何らかの形で強制的に学校へ復帰させるのではなく、自らの意思で学校へ登校するということが重要なのである。たとえ学校へ復帰できなかったとしても、学校をただ拒否し続けるだけでなく、学校への意識が少しでも変わり、肯定的に捉えることができたとしたら大きな前進になると考えられる。また、

たとえば学校に行かない自分、いけない自分ということや、またそれに不安や心配を感じ自分を受け止めることである。まず、本人のありのままの状態から、次の段階が生まれると考えられ、学校復帰もここに立ち戻って捉えられた。(上原貴夫、1998、I、43頁)

現時点の自己のあり方を認識するためにはまず自己を見つめ、自己に気づく、そして自己を知る過程を踏むことである。そして本事業は各々が「自己に向き合う体験」を一番に重視し、そのための活動ベースとして「集団生活体験」と「自然体験」を実践している。

## 2. 集団生活体験の意義

「自己に向き合う体験」というのはどのような状況のときにそのような体験が出来るかは個々によって相違があり、そのような場面をあらかじめ設定しておくことは難しい。よって個々の多様性を包括できるようなあらゆる環境を多くセッティングすることはひとつの手段である。そのひとつに環境としての集団があると考え。特に現代の子どもたちは、少子化などの影響もあり、昔と比べ心理的にも物理的にも他との関わりを持つことが少なくなったといえる。しかし個々の人間形成は、集団の中で生活をして成しえるものであり、集団生活の中で自己の存在を見つめ、己の行動や態度を評価し、望ましい行動へ努力をすることで人間形成をしていくのではないか。人間形成の過程では悩み、葛藤などの不安要素を伴うことも多いが、それらは同年代の子どもたちの間で共通している場合がある。このキャンプでは不登校傾向にある児童生徒が多いことからしても、彼らが共通の体験を有しており、その集団が信頼に値する場合、互いに理解しあえる部分も大きいと考えられる。

また、人づき合いの不得手な者にとっては大勢の人とすぐに関わらなくてはならない状況は苦痛でしかない。キャンプの中では自分に一番近いスタッフとの関係を足がかりに、まずは班の中で関わり合いを持つことで安心できる居場所を確保する。活動を積み重ねていく中で班の中にただ「いる」ことから集団の一員として活動していくことで集団を「自分のもの」にしていく。そして徐々に慣れてきたら班の外へ目を向け、より多くの人と「関わっていく」のである。集団生活というと、一般的には団体行動の場であったり、そのためのしつけや訓

練の手段として位置づけられることも多い。集団を乱すことは許されず、集団にあわせることを強いられ、従わなくてはならない。しかしこのキャンプでは「集団」を、

一人の人間を取り巻く「社会」であり、「環境」である（上原貴夫、1998、Ⅰ、35頁）

と捉え、集団を自分とは違う多様な人間との接点、さまざまな感情や考えがあることに気づくことが出来るフィールドと考えた。また、集団の中での「生活」という面から考えた場合、相手に合わせたり自己を主張したりして自己の生活を組み立てていくことが望まれる。自分自身の自由な生活は尊重されるが、他者との共同生活の状況で実践していくことに意味がある。集団を環境として捉え、共に生活していくという考えはこのキャンプの象徴的な捉え方である。

### 3. 自然体験の意義

豊かな自然環境というのはあらゆる多様性を包括してくれる柔軟さがあるように思われる。時に、多様性というのは我々の予想をはるかにしのぐ変化を見せ、時には自然の厳しき痛感することがある。常に自然環境の中で過ごしていると、我々も自然環境の一部として捉えることが出来るのは、まさしく自然な流れである。

そもそも自然環境には多様性や普遍性といった要素をそれ自体が持つが、それだけではなく、我々に時を忘れさせ、我々を心身ともに解放し、新しいものを受け入れる開放性をも併せ持つ。日の出から日没までに流れる、朝夕の涼しさ（時には寒さ）と日中の暑さ、暗さと明るさといった自然界のリズムから、日常生活のきまりや習慣などのあらゆる縛りから解放され、日常とは異なった体験を得ることが出来る。そして、自然環境の中で生活や物事を考える新たな基準を見出していくことができるのである。

1999年6月の生涯学習審議会答申では『生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ—青少年の「生きる力」をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について—』（1）の中で、

「子どもたちの心の成長には、地域での豊かな体験が不可欠」

と述べており、地域において子どもたちの体験機会を広げることとその支援体制づくりの必要性が指摘されている。また自然体験については次のように捉えられている。

「子どもたちにとって、自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する愛情をはぐくむなど、自然や生命への畏敬の念を育てたり、自然と調和して生きていくことの大切さを理解する貴重な機会」

自然環境の中に入って何かを理解させると言っても、あらかじめ準備された体験や感じ方を強引に求めるのではない。周囲の自然の変化や物事をゆったりと、じっくりと眺められるよう、時間にとらわれないゆとりを持った時間の使い方が必要である。ひとくちに「自然体験活動」といっても実にさまざまな活動があり、ねらいやニーズに応じた活動が始めて効果を生むのである。

#### 4. ボランティアスタッフの役割

スタッフは参加者である子どもたちと行動を共にするが、スタッフは子どもたちの単なる世話係でも、指導者でもない。スタッフとは

「共に暮らす生活者」

(上原貴夫、1998、I、76頁)

である。また、子どもたちはそれぞれが一人前として扱い、両者を次のように捉える。

「共に暮らす者として、生活を築く大切なパートナー」(上原貴夫、1998、I、76頁)

ボランティアスタッフはその多くが学生であり、この事業に関して賛同し、「共に暮らす生活者」として実践できる、またはその意欲がある者ということ以上にスタッフに求められる特別な資質というものはない。キャンプ中には様々な問題が浮上するが、そのすべてをスタッフや大人だけの判断で解決してしまうのではなく、できる限り子どもたちと相談し合いながら問題を解決していく姿勢が望まれている。

とはいえ、スタッフとしての経験が浅かったり、ボランティアやキャンプ自体が初めての者もいることから、最低限の知識や技術などを身につけ、活動の趣旨を理解する必要がある。その機会として数々の研修が設けられている。

### 第三章 プログラムの構成

ふれあい自然体験キャンプでは子どもたちの素直な感情、言い換えれば自己表現(自己表出)を大切にしている。また、各人の自己表現が他者に受け止められる(受容される)という体験を通して、自己を肯定的に捉えたり(自己受容)、自分が他者を受け止める(受容する)ということを学んでいく。自由なキャンプ生活の中で、この表出と受容が各々の行動の基準となっていると考えられる。そしてキャンプに欠かせない「プログラム」を人間関係の形成、自己体験のためのきっかけや導入、試行の場として設けている。

#### 1. 生活重視のプログラム構成

キャンプは非日常的であると言われるが、睡眠、食事、入浴、排泄といった生活の基盤は保障される。実際は、キャンプのはじめには生活リズムのずれから夜眠れない、朝起きられない、食欲不振、排泄の不調などから腹痛を訴える児童もいる。はじめから無理やりキャンプの生活に引き込もうとはしない。これらのことも含め、以下のことが目安となってプログラムが組まれていく。

- ①行事中心ではなく、生活中心のプログラムとする。
- ②1日の生活時間は余裕を持ち、不登校児へのきめ細かな個別対応を行う。
- ③睡眠時間及び自由時間を十分確保し、特に不登校児に疲労感を残さないよう配慮する。

- ④生活全般に付き、管理的雰囲気にならないように十分配慮する。
- ⑤宿泊については、活動班とは別の班構成（男女別）とする。
- ⑥参加者への指示、伝達は放送等をできるだけ避け、「連絡板」の設置により参加者が自主的に情報に接する方策をとる。

## 2. 活動プログラムの進行と人間関係の形成

### 2-1 短期キャンプ

短期キャンプでは長期キャンプの前段階としてキャンプに慣れるということに重点が置かれる。その理由としては、長期キャンプが5泊6日（H13からは6泊7日）にもおよび、親元から離れ突然キャンプに参加することに抵抗を感じるものも多いからだ。

#### 【平成16年度 望月短期キャンプの実施内容】

場所：望月少年自然の家 期間：6月26日（土）～6月27日（日）

【1日目】 出合いの集い、仲間作りゲーム、野外炊飯、キャンプファイヤー（室内泊）

【2日目】 ネイチャーハイキング、別れの集い

### 2-2 長期キャンプ

長期キャンプこそ実際のキャンプ生活であり、自分の考えや力で生活していかなければならない。まず、参加者が自己体験をすることをねらいとしているため、かなり自由な生活や行動が認められている。

#### 【平成16年度 望月長期キャンプの実施内容】

場所：望月少年自然の家 期間：7月31日（土）～8月6日（金）

【1日目】 出合いの集い、仲間作りゲーム、野外炊飯（テント泊）

【2日目】 オカリナ作り、ネイチャーハイキング（室内泊）

【3～4日目】 火おこしとシェルター練習、パッキング、野営（ソロキャンプ）、チャレンジタイム（4日目は室内泊）

【5日目】 乗馬体験、買い物野外炊飯（自由泊）

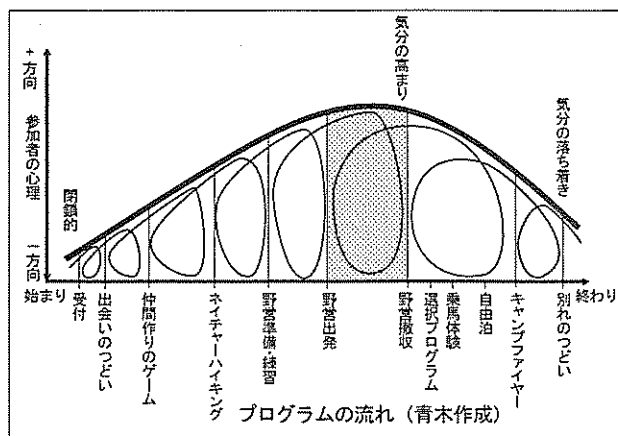
【6日目】 朝食野外炊飯、班別活動、キャンプファイヤー（室内泊）

【7日目】 野外炊飯、お別れパーティー、別れの集い

#### 【プログラムの流れと参加者の心理～長期キャンプ】

キャンプの開始直後は緊張、不安などの要素から参加者の心理は（－）方向を位置する。プログラムを通して徐々に慣れや安心感を築き（＋）方向へ進んでいく。キャンプ終盤では（－）方向へ転じるが、これは心を閉鎖的にしてしまうのではなく気分が落ち着いた状況を示す。キャンプ全体を通して参加者が心理的にウォーミングアップ→トップ→クールダウンの流れになるよう、プログラムを設定していく。また、一つ一つのプログラム自体の中にも同様の流れがあり、その様子は螺旋で示している。プログラムは孤立したものでなく、全体の流れの中のひとつの山





場として位置づけられていく。最終的にキャンプの始まりと終わりとを比べると、参加者の心理が(+)に位置できることが好ましい。

実際、プログラムに対する参加態度は様々であり、すべての参加者が同じとらえ方をし、心理面での変化を見せるとは限らない。よって曲線には個人差があることが考えられる。

しかし参加者の心理と集団との関わりの変化を相対的に考えた場合、長期キャンプにおけるプログラムと心理の流れを大きく3つの段階に分けることができるのではないかと私は考える。

#### 第一段階〔心理的基盤の形成と自発的な行動の表れ〕…受付から野営まで

初対面の子ども、スタッフの中で、対人関係はごこちない。初期のプログラムを通して始めは見知らぬ人のレベルにあった班員が、お互いに意識をし始める。以降しばらくの活動を班で過ごし、お互いを知ることで班を自らの心理的基盤(居場所)として確保していく。子どもの周囲に本当に信頼できる人がいて、「安心感・信頼感・保護感」に包まれたとき、子どもは「自発的な行動」をとるようになってくる。

#### 第二段階〔自己への目覚めと積極的な行動の表れ〕…野営以降(～自由泊)

野営では出発してから帰ってくるまでの山の中での一夜を基本的に自分で行うものとしている。野営はこれまでのプログラムの中でもより挑戦的なプログラムである。班での行動、協力を通して仲間を強く意識しながら、個人の時間をもつことになる。キャンプの中で自己と向き合う絶好の機会となりうるのだ。野営後は班を超えた対人関係のきっかけとして選択プログラム、自由泊などのプログラムが設けられ、自己決定の機会を増やしていく。

#### 第三段階〔主体的な行動の表れ…野営以降(班別活動～)

子どもたちは自由泊以降、班と班以外のコミュニティーとを行ったり来たりする。ここで友達と人のために何かを作り上げる、共有するという要素が加わる。ここでの挑戦は新たな自分を発揮し、自己の可能性の気づきにつながることもある。そして次第にこの時期になると別れというものを意識し始める。別れを否定的に捉えるのではなく、肯定的に考えられるようはたらきかける。日常生活へ戻った後の自分をも肯定的に考えることができた場合、行動面において主体的な行動へ変容が見ることができた場合、大いにこのキャンプにおいて効

果を成したととらえることができるのではないか。

### 3. 主なプログラム内容の検証

望月キャンプで行われる代表的なプログラム（野営）について検証する。（ネイチャーハイキングから野営、装備片づけまでの流れ）

#### (1) 活動内容

ア ネイチャーハイキング（2日目）…ネイチャーゲーム、イニシアティブゲーム 等

イ 野営準備（野営当日午前）…①かまどの作り方、火のおこし方

②シュルター（寝床）作りとパッキング

ウ 野営（メインプログラム）…山中にある8箇所のサイトで各自、自由に過ごす。

エ 装備片付け（野営終了後）…ごみ捨て、シュラフ干し、飯ごう洗い 等

#### (2) 参加者の感想からの考察

【参加者の感想】（晴れの年の野営）※事業報告書の中に記載されている事後調査から抜粋

- ・まさか山の中で1人きりで寝るとは思いませんでした。
- ・1人で一晩過ごせるかどうかドキドキしていたけど、みんなで協力し合って何とか過ごせた。
- ・なんといっても一人で自由にできる時間がもらえたことがうれしくて、自分ひとりで楽しんでいました。

考察1：ソロキャンプは子どもたちの想像を超えていたものであったことが分かる。また、肉体的にも精神的にも負荷がかかるものであり、これを達成することに子どもたち自身が価値を置いているようにも感じられる。ソロキャンプは自分の挑戦の場であると同時に仲間との共存の場にもなっている。

【参加者の感想】（雨の年の野営）

- ・「今年こそは絶対山で寝る！！」と考えていたのに、雨のせいで目標が達成できませんでした。次こそはぜったい雨も降らせないし、腹痛にもならないようにしたいです。
- ・一番いい体験になったのはソロキャンプでした。理由は「雨」です。あのとき雨が降るから、もっといい体験になるという計画はありませんでした。

考察2：雨の日のソロキャンプに対して、子どもたちの感想は独特の思いが読み取れる。本来なら自分の挑戦の機会となったソロが、雨によって断念したりテントでの一夜になることを悔やむのと同時に、雨を前向きに捉えることができている児童もいる。

## 第四章 ふれあい自然体験キャンプの成果

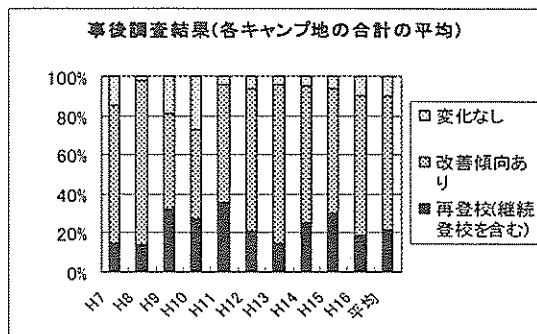
これまで参加児童生徒は昨年度までで2300名を超え、そのうち不登校傾向にある児童は700名（推定）以上にのぼる。（第一章4を参照）また、スタッフの数においては1300名ほどの参加があった。（いずれの数字も延べ人数ではある）

## 1. 事後調査において数値から見る実績

本事業は不登校対策としてしているため、具体的な数値でその成果を示している。その一つとしてキャンプ後、不登校児童生徒の保護者を対象に、不登校児童生徒の再登校状況、改善状況などについて事後調査を行っている。

### 【事後調査結果（平均・％）】

検証：H16までの平均では不登校児童生徒の22％が再登校、改善傾向が68％。したがってキャン



プ後の事後調査では約8割が良好な結果を示しているといえる。しかしこれが長期的にはこの傾向が維持されているのかは分からないため、今後も事後追跡が必要だといえる。

## 2. 参加者からの視点

(1) 調査方法 聞き取り調査（インタビュー）45分

(2) 対象者 参加者H、Rの2名。

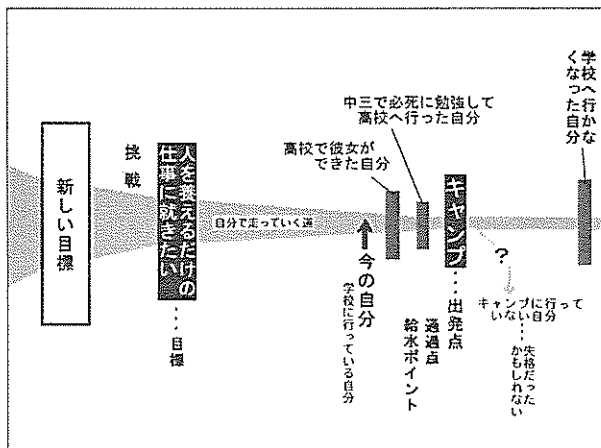
（ともに16歳男性。参加当時の学年はHが小5～中3、Rが小5～中2。当時Hには不登校傾向あり（保健室登校）。Rには不登校傾向なし。現在、長野県内の公立高校に通う。）

(3) 実施日 12月3日（阿南少年自然の家）

(4) 調査結果

項目：将来の自分

<参加者Hと作成した将来図>

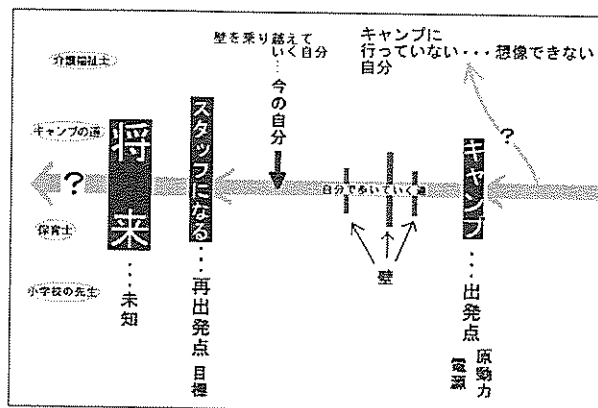


### 図の解説・検証

Hにとって学校へ行かなかった自分がこの図の始まりであり、キャンプへ行ったことで道が広がったという。この道をHはマラソンみたいなものといい、キャンプは通過点、給水ポイントだとも表現している。Hにとって高校へ行くことは大きな選択であったと考えられる。また、それまで

は人付き合いが苦手だったことから考えても人と付き合うということが大きな変化とも考えられる。新しい目標の具体的なものはまだ浮かばないが、仕事に就きたいという思いが強く感じられた。

＜参加者 R と作成した将来図＞



図の解説・検証

キャンプは R にとって「出発点」だという。同時に原動力でもあり電源（スイッチ）とも表現していた。キャンプに参加している中で生まれた「スタッフになりたい」という気持ちが現時点の目標となっているという。そしてこれはゴールではなく再出発点であり、その後の将来は未知で

はあるが、再出発点に到達したらまたその後が見つかる気がする」と述べた。現時点でうつすら考えている将来として介護福祉士、キャンプの道（職業として）、保育士、小学校の先生が挙げられた。これらはキャンプを通して見つけたものだという。

インタビュー全体を通しての考察

H や R は「時代の流れと共に変化していく」ことも意識しながら、キャンプには大切な部分は残っていてほしいという思いが伝わってきた。H、R 共にいえることは現在、非常に前向きな姿勢であることが印象的であった。キャンプは終着点ではなく、出発点であるということが非常に大切なポイントになってくる。キャンプに依存してしまうのではなく、自分の道を切り開いていくことがこのキャンプの目標である。

H はキャンプに参加することで人付き合いの大切さを学んだと考えられる。また、R に関してはキャンプの要素の中でもスタッフから強く影響を受けており、将来の目標を見出しているように考えられる。これらはキャンプの大きな成果であるといえるのではないかな。

### 3. スタッフの視点から

- (1) 調査方法 アンケート（郵送、手渡しによる）
- (2) 対象者 ふれあい自然体験キャンプスタッフ、スタッフ OB・OG
- (3) 実施期間 11 月 23 日～12 月 13 日 回収状況 31/50 （62%）
- (4) 調査結果

・項目 1～3（調査対象者のスタッフ活動期間中の属性）

検証：所属は半数が短大生、残りが大学生であり、大学卒業後、大学院に進学した後もスタッフを続ける者もいる。いずれのスタッフも望月、あるいは阿南キャンプで班つきのスタッフを経験しており、加えて市町村キャンプを経験した者は2割程いる。

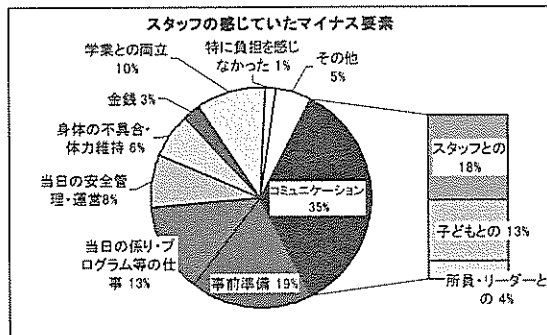
#### ・項目4（キャンプに関わろうと決めた理由）

検証：スタッフの中には新しい活動（未知）に興味があったと同時に、キャンプに参加することを通して自己を充実させたいと思っている者が多いようだ。また子どもへの関心があり、子どもと関われる活動ということでこのキャンプに参加する者も多いようである。

#### ・項目5（キャンプ参加者と同年代の子どもと接する機会）

検証：キャンプ前までに子どもと接する機会があまり無かった者と、すでに何らかの機会に接していた者に大きく分かれた。子どもと接することについての経験に差がある中でキャンプでは共に同じスタッフとして子どもと接していたことがわかった。

#### ・項目6（スタッフの感じていたマイナス要素）



検証：子どもとの関わり方についてだけでなく、スタッフ同士の対人関係（コミュニケーション）について悩みを持っていたようである。また、事前準備や金銭、学業に関して負担に感じている人もいる。学生であることからしても、これらの負担はできる限り減らしていかなければならない。

#### ・項目7（悩みを相談していた人）

検証：キャンプ活動における悩みや負担についてはキャンプに関係する先輩や後輩、友人に相談している者が多いことが分かった。互いの悩みやその状況を理解しあえるといったことが考えられる。逆にキャンプに関わらない友人や家族に相談している者もいる。

#### ・項目8（スタッフになって自分が何か得たことや成長したと思うこと）

検証：子どもや仲間と接する中で相手に対する見方や多様な物事に対する考え方などの視野を広げているようである。また、思いやりや、理解しようとする気持ちによって人と接することの楽しさに気づいてきているようだ。

#### ・項目9（子どもの変化）

検証：多くのスタッフは子どもの主体的な行動が増えているということを指摘した。特に人と関わりを避けていた子ども、大人しい子どもに変化が見られたようである。また、自己中心的、乱暴な行動を取ってしまう子どもに関しては気遣いや年下の面倒を見られるという変化があった。これらの変化はソロキャンプや班での活動（キャンプファイヤー班発表の話し

合い等)の際によく見られたということである。

・項目 10 (子どもと接する上で気をつけていたこと・心がけていたこと)

検証: スタッフは子どもの体調やケガなどに注意を払っていることが分かった。また、子どもの自主性を尊重するという意見も多く、物事を強制させない、根気強く見守るというものの中に含まれている。子ども親しむうちにすぐに手を出してしまうこの気持ちを制しながら、一定の距離を保ち子どもたちと接していくことの大切さを指摘する者もいる。

・項目 11 (事前に身につけておきたかったことやっておきたかったこと)

検証: 不登校、障害 (自閉症、ADHD 等)、キャンプ技術、自然についてなど知識を身につけておきたかった者や、なにかしらの経験を積んでおきたかったものが多い。また、スタッフ間のコミュニケーションの必要性を指摘する者も多数いる。

・項目 12 (キャンプの良い点・改善点)

次のような回答があった

- ・限られた期間だからこそ集中し純粋な気持ちでキャンプや子どもに望むことができる。
- ・子どもから多くのことを学びながらスタッフも共に一緒に成長していくことができる。
- ・このキャンプは子どもが生き生きとしており、子ども同士の関係がいい。
- ・自分たちで事前から準備し、キャンプを作りあげていくことができる
- ・コミュニケーション不足を解消しなくてはならない

アンケートを通しての考察

本アンケートではスタッフにとってふれあい自然キャンプというものがどう影響しているのか調査を行った。スタッフはその多くが学生であり、学生生活の一環としてこの活動に参加しているものがほとんどである。この活動を通して以前の自分には無かった、物事を見る広い視野を手にした者や、人との関わりの大変さ、楽しさというものに気づいた者もいる。スタッフも参加者と共に成長していたということが言えるのではないかな。また、活動していく上での障害も数々あることが分かった。スタッフは学生であり、スタッフ自身発達途上であるといっても過言ではない。キャンプ中に抱えた悩み、不安要素などに寄り添い、スタッフのフォローを互いにしていくことも重要である。

いずれにしてもこのキャンプが将来の道を決定付けていく要素に至った者も少なくないことが予想できる。

おわりに

現在、学校現場には不登校児童生徒だけでなく ADHD など障害を持った児童も増えている。それらの子どもたちが学校に適応できていないといわれるのは、学校は子どもたちが多様化しているにもかかわらず、それに対応できていないという現状があるとも考えられる。子どもというのはそもそも多様であるのが自然であって、すべての子どもを単一化して考えるこ

とのほうが不自然であるといっても過言ではない。

このキャンプは学校のように算数や国語といった教科を学習する場ではない。集団という環境の中で、数あるプログラムをきっかけとし、自己体験をしていく場である。プログラムは子どもたちの心理面を考慮し、全体の流れを大切に企画されている。あらゆる環境とスタッフの働きかけによって、学校に親しみを持てなかった子どもたちでも、安心して人とのつながりを持てる場であるとも言える。いわば人と人とのつながり（人間関係）といった人間的な自然を学べる場である。自然環境と向き合うことで自然の素晴らしさに気づき、己の存在価値を見出していった者がいる。親しい友達を作ることができなかった子どもがキャンプで気の合う仲間を作った。楽しい学校生活が送れなかった子どもが自分に自信をつけることができた。そしてそれらはその後の生活につながっていると考えられる。この論文で挙げた成果というのもその一端に過ぎない。それゆえに1週間のキャンプだけで人間形成にそんなに大きな影響を与えるのかと言われかねない。しかし、我々は日常生活でこれほどまでに自然環境と向き合い、人と向き合い、なにより自分と向き合う体験をしてきたであろうか。

この論文執筆を通してこれからの課題も見えてきた。一つ目にキャンプの質を保つことである。キャンプを構成する多くの要素の質を保ち、向上させようとするものである。それは自然環境を維持することであり、キャンプの理念やスタッフとしての理念を引き継いでいくことである。環境保全、ミニマムインパクトと盛んにいわれる昨今において、本事業ではこれほどまで環境に配慮がなされているであろうか。環境に配慮したプログラム作り、スタッフの世代間の引継ぎ、スタッフ間での相互理解、ケアの重要性が浮き彫りとなっている。二つ目の課題として継続して本事業を展開していくことである。特に本事業は行政とも結びつきがあることからしても、本事業を糧にいかにして社会に貢献していくかということでもある。スタッフとしての経験を各々の道で生かすことも社会への貢献だといえる。これからはふれあい自然体験キャンプとして、社会へ何らかのアプローチが必要になってくるのではないか。教育界に貢献できることも少なからずあると考えられる。

我々には子どもたちに限らず「リアルな体験」(実体験)が少ないといわれる。それは自然環境から始まり人間の内なる自然をも含めてあらゆる自然から隔離されてしまっている状況を指すのではないか。自然環境で言えば、そこは危険に満ち溢れている。しかしそこには生命があふれ、すべての生き物がその生命を全うしている。これこそ現代の我々が自分の目で見据えるべき実態なのではないか。このことは人間の内なる自然に言い換えても同じことが言える。子どもたちの感想の中に印象深い言葉があった。

人間一人では生きて行けない。やっぱり誰かがやってくれるからできるんです。みんなが協力するからできているところがたくさんありました。やっぱり人間は協力し合い、みんなで声をかけ合って生きていく動物なんだと思いました。

まさしく、人間は一人では生きていけない、自然界の一部である。このことを自覚することが現代の我々にとって必要不可欠なことであると私は気づくことができた。

参考文献

- ・長野県教育委員会（文化財・生涯学習課）『平成7年度～平成16年度ふれあい自然体験活動推進事業報告書』1996～2005
- ・上原貴夫『不登校児童・生徒の集団場面における行動特性と人間関係に関する研究Ⅰ. 不登校児童生徒支援のための野外での集団キャンプの企画に関する研究』（平成8～9年度科学研究費 補助金 研究成果報告書）1998
- ・上原貴夫『不登校児童・生徒の集団場面における行動特性と人間関係に関する研究Ⅱ. 不登校児童生徒の人間関係形成に関する研究』（平成8～9年度科学研究費補助金 研究成果報告書）1998
- ・ふれあい自然体験スタッフ チーム'95『子ども達に伝えたいこと おとな達にわかってほしいこと』長野県短期大学人間関係論研究室、1997
- ・東京シュレの子どもたち『学校に行かない僕から学校に行かない君へ』教育史料出版会、1991
- ・川嶋宗継・市川智史・今村光章『環境教育への招待』ミネルヴァ書房、2002
- ・江橋慎四郎『野外教育の理論と実際』杏林書院、1991
- ・岡島成行『自然学校をつくろう』山と溪谷社、2001
- ・星野敏男・川嶋直・平野吉直・佐藤初雄『野外教育入門』小学館、2001
- ・「平成16年度生徒指導上の諸問題の現状について（概要）」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/17/09/05092704.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/09/05092704.htm)
- ・生涯学習審議会「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ－青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について（答申）」1999年  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/shougai/toushin/990602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/shougai/toushin/990602.htm)
- ・不登校に関する調査研究協力者会議「今後の不登校への対応の在り方について」2003  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/022/gaiyou/021001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/022/gaiyou/021001.htm)
- ・星野敏男『学校教育と自然体験』  
<http://www.shizen-taiken.com/thoshino/20031010.html>



付属資料 1

【参加者・スタッフ人数（人）】（平成7年度～平成16年度 事業報告書 参考）

	望月キャンプ						阿南キャンプ					
	短期キャンプ			長期キャンプ			短期キャンプ			長期キャンプ		
	参加者	内不登校 児童生徒数	スタッフ	参加者	内不登校 児童生徒数	スタッフ	参加者	内不登校 児童生徒数	スタッフ	参加者	内不登校 児童生徒数	スタッフ
1995(H7)	96	33	19	54	35	19						
1996(H8)	63	24	23	57	24	23	78	22	21	55	43	21
1997(H9)	57	19	27	52	16	31	47	23	27	52	24	33
1998(H10)	58	18	38	58	19	33	49	20	29	54	26	34
2000(H11)	32	8	35	53	9	32	27	13	35	58	31	38
2001(H12)	30	8	32	44	19	31	24	7	45	75	29	43
2002(H13)				54	22	33				54	17	35
2003(H14)	48	17	25	54	17	27	60	12	32	63	19	37
2004(H15)	31	12	27	50	10	32	46	13	40	54	18	49
2005(H16)	30	4	18	47	9	18	53	13	38	51	13	42

【キャンプ地】

